

戦争經濟と消費節約

—— 第一次歐洲大戰に關する一研究 ——

吉 田 秀 夫

近代の戦争は、それが南米の局地や印度の田舎で戦はれるものでない限り、極度の大規模消費の基礎の上に戦はれるものである。そしてこのことは、驚くべき老大な國家財政の膨脹といふ形をとつて、現れる。これは吾々が今日の日本や歐洲の情況から直ちに知つてゐることであるが、各種の研究調査が行届いてゐる第一次大戰の結果からこのことは最も端的に知り得られるところである。すなはち第一次大戰中に於ける交戦各國の歳出總額を平時に於ける其の歳出と比較して、其の増減を見るならば、このことは極めて明瞭になる。併しながら大戰中には、交戦各國に於いては何れも大なり小なりの紙幣價值の變動が見られるので、その各國各年の數

字を漠然と合計したのでは、結果は全く無意味なものとなつてしまふ。そこで先づ毎年の紙幣價值を求め、これを大戰勃發の前年たる一九一三年を基礎とせる卸賣物價指數で除して、これを一九一三年價值に還元し、更にこれを平價で弗に計算するといふ方法をとる時は、可成りに近い數字が得られるであらう。かくの如くして一九一三年弗價值に還元した歳出額を、大戰勃發以前の各國の財政状態より推測し得られるその期間中の正常歳出見積額と比較して見ると、次の如き推定戦費が得られる。(拙著『戦争と國家財政』第三章)

第一表 一九一四—一九一九合計年度に於ける各交戦國推定戦費

(單位百萬弗、一九一三年價值に換算)

	戦時歳出	正常歳出	同盟國へ融資	差額
英 帝 國	三六八一五	一〇、五七八	五〇四五	二二、三三八
ベルギー	一、二八〇	六二八	—	六六二
フランス	一六、三二八	五、〇二〇	一、一〇四	一〇、一〇四
ギリシヤ	一五五	三二四	—	(-) 六九
イタリヤ	七、四三一	二、九四三	—	四、四八九
日 本	一、三九〇	一、四七六	—	(-) 八六
ポルトガル	六四二	四六八	—	一七四
ルウマニア	二一〇	四一一	—	(-) 二〇一
ロ シ ア	一三、五六一	五、九〇三	二九二	七、三六六

セルビア	三六六	一四五	—	二二二
合衆國	二〇、二一四	二七、七七七	五、〇四一	一三、三九六
聯合國合計	九八、三三八	三〇、五六三	一一、四八二	五六、一八四
澳匈國	一〇、八四八	五四一〇	—	五、四三八
ブルガリア	二四六	四七三	—	(一) 二二七
ドイツ	二三、一七六	三、二八一	一、二八九	一八、六〇六
トルコ	一、六一三	九三二	—	六八一
協商國合計	三五、八八三	一〇、〇九七	一、二八九	二四、四九七
總計	一三四、二一一	四〇、六五九	一三、七七二	八〇、六八一

これによると交戦國の戦費は弗に換算して約八〇七億弗といふことになる。これは前述の如く一九一三年價値に還元した上での計算であつて、その爲めに數字は比較的小さく現れてゐるのであるが、計算によつてはこの數字を二〇八六億弗とし、又は直接戦費一八六二億弗、間接戦費一五一六億弗、合計實に三三七八億弗としてゐるのである。

約八百億弗といふ前掲の數字は最後の數字の僅か四分の一にも當らぬものであるが、それにしてもこれは驚

くべき莫大な數字である。例へば大英國は一六八八年の名譽革命より第一次歐洲大戰の勃發に至るまでの二二六年間に、屢々大戰争を行つてゐる。すなはちウイリアム三世の戦争は一億五千萬弗を要し、アン女王の戦争には二億五千萬弗以上を費し、スペイン戦争とオウストリア王位繼承戦役は二億弗以上を要した。又七年戦争には三億五千萬弗以上を費し、アメリカ獨立戦争には五億弗以上を費し、更にナポレオンを相手に廻しての大戦争では實に六十億弗が失はれ、更に下つてはクリミア戦争では三億五千萬弗を費し、最後に南阿戦争でも殆んど十五億弗が失はれた。併し英國はこの二百數十年間に、戦争に對してのみ國費を支出してゐたものではない。戦争以外の幾多の事業に對して多額の経費が支出されて來たのであるが、英國が大をなすにつれてこの非軍事支出は増加する一方であり、加之國債費の負擔も著しく増加して來たのであつた。而もこの二二六年間を通じて大英國の歳出額は、その凡ゆるものを合算しても、概數で僅かに五三〇億弗である。然るに大戰は、大戰後の巨大な復興費其の他は全く別にして、僅かに戦争中の數年間の而も戦費としての支出だけで、内輪に計算しても八〇七億弗といふ巨額を消費してゐるのである。すなはちこの八〇七億弗といふ戦費は、大英國の二世紀と其の上四分の一の期間の全財政を賄つてなほその後約八分の三を餘すところのものである。アメリカの場合をとつて見ればこのことは一層明かとなる。アメリカは一七九一年の建國以來一九一三年末に至る約一世紀四分の一の間に、これ亦多額の國費を支出してゐる。すなはち一八一二年には英國と戦ひ、次いでメキシコと戦ひ、又六十年代には破壊的な南北戦争があり、更に世紀末には米西戦争が戦はれた。その上又ルイジア

ナの買収、アラスカ獲得の爲めの支拂、ヴァジン諸島の買収、フィリピン諸島獲得の爲めの支拂があり、更に又パナマ運河の大工事がある。これ等總ての外に更に凡ゆる他の國費を合致して、而もその合計は二四五億弗である。これは八〇七億弗の三分の一にすら達しない數字である。

かくの如くに近代的大戦争は、天文學的な數字に達する國費の支出の上に戦はれる。そこで屢々それは國費の支出能力によつて戦はれるかの如き錯覺が生ずる。成程財政的又は金融的な操作は、戦争經濟の運営に於いて、極めて重要な役割を演ずるものである。これは何人も否定することは出来ない。併しそれが近代的大戦争を賄ふ根本的なものであると考へるならば、それは大きな誤謬であると云はなければならぬ。

二

上述の如くに近代的大戦争に於いては國費は異常なる大膨脹を告げるものである。この國費の大膨脹は平時財政に於けるとは比較にならぬ重大な歸結を伴ふものであり、更に國費の多くが經濟的には不生産的に消費されるといふ點では、小さからぬ特異性を有つものであるけれども、而も戦時に於ける經費は根本的性質に於いて平時のそれと異なるものではあり得ない。すなはち一定の貨幣額としての租税乃至公債が、それだけに於いて何物かを生産するものでは決してないのである。

この關係を最も端的に示すものは租税である。戦争財政に於いては必然的に増税の手段がとられ、又事實を

これは極めて重要な戦争經濟運營の手段であるが、その經濟的意義は、その根本に於いては、一般の租税の場合と變るものではない。すなはち増税が行はれた場合に於いては、納税者はそれだけ消費能力を喪失し、従つてそれだけの消費を節して、この節約分は國家の手に移るのである。勿論増税そのものによつて直ちに商品量は變化するものではなく、又増税しないからといつても同様に商品量は増加するものではないから、無いものは同じく無く有るものは有るといふだけのことであり、假に紙幣の形で所謂購買力が納税者の手に残つてゐても商品が無ければ買へないわけであるが、こゝではインフレーションを問題としてゐるのではないから、これはこゝでは問題ではない。とに角租税によつて消費力が國民の手から國家に移轉せられることは變りはない。

所が租税に代へて戦費は屢々公債によつて賄はれる。問題が公債になると、右に述べた租税の場合に於ける極めて看易い事實は往々にして看過されて、一つの謬見が屢々起つて來る。それは、公債による時には、將來の消費力が現在のそれに轉化されると考へる錯覺である。

通俗財政學者の財政論の結果として世上往々にして極めて誤つた公債論が信ぜられてゐる。すなはちこれによれば、現實に國家消費力が存在しない場合に、これを借金によつて賄ふ爲めに公債の手段がとられ、すなはち將來の消費力がこれによつて現在の消費力たらしめられるといふのである。これは單に國家經濟の立場からのみ云ふならば、一應便利な説明であるかも知れないけれども、實はかゝる説明は經濟的事實の正反對を述べてゐるものである。

例へばこゝに國家が一億圓の公債を發行したとしよう。それは如何にも一見したところ、現在一億圓が國家の手に歸し後に至つて利子付きで一億圓が戻つて來るといふところから、國家が一時一億圓を預つて、償還後に於ける國民の將來の一億圓の消費力を國家の手によつて現在化したものであるかの如く感ぜられるかも知れない。併し事實はこれに反する。國家が一億圓を徵收するならば、物價騰貴があらうとなからうと、とに角一億圓の價格に該當する商品は一般市場から國家の手に引上げられることとなる。そして一般市場に残るものは商品に代へての公債である。然らば將來に於いて公債が償還せられる時はどうなるのであるか。それは極めて簡単なことである。國家がその時に於ける一億圓を國民の一部から租稅其他の方法で徵收して、これを國民の他の部分たる公債所有者の手に移轉するだけのことである。要するに公債が償還せられる場合に於いて、この償還に充てられるものは、その償還の時に於ける國民の消費力又は消費に充てらるべき商品であり、國家は單に國家權力によつてこの移轉を媒介するだけのことではない。國家は何も公債募集の時に於ける消費力を償還するのではない。極端に云ふならば、公債は償還しても破棄しても、これだけとして何も國民的富の一錢をも増減せしめるものではない。これを反面より云ふならば、公債とは、將來に於ける價值の分配關係のあるものを、國家權力によつて保證することによつて、國民の現在の消費力を徵收する手段であり、結局問題は常に現在の消費力にあるのである。

要するに、戰爭に於いて國家が何等かの形に於いて徵收せるものはその際の現在の消費力であり、又は現在

の商品である。それは金何圓といふ形をとる租税又は公債の問題でもなく、又は將來の生産物の問題でもない。戦費が如何にその貨幣額に於いて大であらうとも、眞の問題は金何圓にあるのではなく、現在の生産物としての鐵であり油である、そしてこの鐵や油の生産量を増大し、同時に又それを出來得る限り多量に國家の手に確保せんが爲めに、國民は凡ゆる形に於いてその現在の消費を節し、又戦争需要と關係薄き商品の生産を節しなければならぬのである。

三

近代的大戦争は、その戦費の天文學的數字が物語る如くに、超大規模の國民の消費節約の上のみ戦はれるものである。然るに消費節約は往々にして切符制度や節米運動の形に於いてのみ理解せられてゐる傾きがある。併しながら消費節約の眞に注目すべき部面はむしろかゝる方面以外にある。吾々はこれを簡單に第一次歐洲戦争の結果に就いて辿つて見よう。

先づ吾々が見るべきものは、大戦中に於ける物價騰貴の跡である。大戦中に於いては商品の如何を問はず一般的に物價騰貴が起つたのであるが、そこに於いて顯著なることは、單にその程度が甚しい許りでなく、又交戦國も中立國も共に物價騰貴を免れなかつたといふ事實である。今世界主要諸國に就いて、一九一三年の卸賣物價の平均を一〇〇とし、一九一八年のそれと比較して見ると、次の結果が得られる。(Ernst Wagemann,

第二表 大戦中卸賣物價騰貴指數

フ ラ ン ス	三四〇
イ タ リ ヤ	四〇九
英 國 (エ コ ノ ミ ス ト 指 數)	二二五
ス ウ エ ー デ ン	三三九
ノ ル ウ ェ イ	三四五
デ ン マ ア ク	二三二
オ ラ ン ダ	三九二
ア メ リ カ 合 衆 國	一九六
カ ナ ダ	二〇五
英 領 印 度	一七八
濠 洲	一七八
日 本	一九六

これは大戦中を通じての物價騰貴の跡であるが、併し次に更に立入つて、大戦の全期間に於いて物價は如何なる波をえがいて騰貴して行つたかを辿つて見よう。これに關しては資料が比較的詳細な英國に就いて見るのが最もよいのであらう。英國に就いては各種の物價指數があり、その各々は一長一短を免れないが、吾々は

こゝではスタチスト及びエコノミスト誌の指數をとることゝしよう。兩者は何れも卸賣物價指數であり、大戦勃發直前の一九一四年の一月乃至七月の各月末物價平均を一〇〇とし、各月末のこれに對する指數を示したのである。それは次の如くである。(Arthur L. Bowley, Price and Wages in the United Kingdom, 1914—1920. 1921.)

第三表 大戦中英國卸賣物價指數

	スタチスト		エコノミスト	
	月末	年平均	月末	年平均
一九一四年	八月	一〇六	一月	一〇四
	九月	一〇八	二月	一〇七
	十一月	一〇八	三月	一〇七
一九一五年	一月	一一七	四月	一一六
	三月	一二六	五月	一二八
	五月	一三〇	六月	一二九
	七月	一二九	七月	一二七
	九月	一三一	八月	一二九
	十一月	一三七	九月	一三五
一九一六年	一月	一五〇	十月	一四八

戦争經濟と消費節約 (吉田)

年	月	値	値
一九一七年	三月	一五八	一五五
	五月	一六四	一六七
	七月	一五八	一六二
	九月	一六三	一七一
	十一月	一八三	一八五
	一月	一九三	一九一
	三月	二〇五	二〇五
	五月	二一二	二〇九
	七月	二一四	二一六
	九月	二一四	二一八
	十一月	二二二	二二三
一九一八年	一月	二二五	二二四
	三月	二二八	二二七
	五月	二三一	二三二
	七月	二三三	二三六
	九月	二三九	二四一
	十一月	二三七	二四〇
	一月	二三三	二三六
	三月	二三三	二三三
	五月	二三三	二三二
	七月	二三三	二三三
	九月	二三三	二三三
一九一九年	十一月	二三三	二三三
	一月	二三三	二三三

三月	二二四	二二〇
五月	二三五	二三一
七月	二五〇	二四九
九月	二六〇	二四九
十一月	二八〇	二五四
		二七〇
一九二〇年	三〇一	二九八

この表によつて見ると、一九一七年末までと一九一八年初からとは、物價騰貴の状態に變化があることが知られる。すなはち一九一五年乃至一九一七年の年平均指數は、スタチスト指數によれば、各々、一三一、一六五、二一二であるのに、一九一八年乃至一九二〇年では、これは各々、二三三、二四九、三〇一である。換言すれば開戦以來物價は規則的な騰貴をして來たが、一九一八年からは騰勢は稍々鈍化し、一九二〇年で又も急騰に轉じてゐるのである。

一九一七年までの規則的物價騰貴は、物價抑制の手段が何もとられなかつたのによるものである。この期間に就いて何よりも眼につくことは、物價騰貴が極めて規則的であることである。すなはち第三表によれば、開戦より一九一七年末に至るまでに、毎年略々規則的に二七%の騰貴が行はれてゐる。これは毎月約二%の複利により騰貴に等しい。次にこの期間の毎月の指數を立入つて見るに、これ亦年々同じく現れて來る一つの傾向が見られる。それは毎年夏季に於いて騰勢は鈍化し、冬期に於いて激化するといふことである。

一九一七年の後半からは物價抑制の手段がとられることゝなつた。すなはち同年の九月からは食物の最高價格が決定せられた。そしてその範圍は次第に擴張せられて行つたが、その結果が物價數の上に現れ出したのが一九一八年以後のことなのである。

四

然らばこの物價騰貴を商品種類別に見るときは、如何なることが知り得られるであらうか。先づ英國の場合に就いて検討しよう。(Bowley, *ibid.*)

第四表 重要商品別エコノミスト指數

年	月	穀類及び 肉類	其他 食品	織物及び 織物原料	鑛産品	雜品
一九一四年	一—六月	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	七月末	一〇二	一〇一	九八	九六	九八
	九月	一一四	一一六	九七	九八	一一五
	十一月	一二一	一二六	八一	九八	一二二
一九一五年	一月	一三九	一一八	八五	一〇七	一三三
	三月	一四九	一二二	九五	一三三	一四二
	五月	一五八	一二五	九二	一二四	一四五

一九一九年	七月	九月	十一月	一月	三月	五月	七月	九月	十一月	一月	三月	十二月
二二七	二二八	二二一	二二四	二二七	二二七	二三二	二三七	二四七	二五一	二五九	二六六	二三八
二二四	二二四	二二三	二二四	二二四	二二四	二二二	二三〇	二三四	二四七	二四五	二六一	二三〇
二五七	二九四	三〇六	二五七	二三九	二六九	二六一	二九五	三一四	三五一	四三〇	四七二	二〇四
一七一	一八六	一八三	一七一	一七四	一九二	一九二	二一三	二一六	二二五	二五〇	二五七	二五一
二三八	二四七	二四八	二三八	二三一	二三六	二三六	二五二	二三九	二四九	二七三	三〇四	二二七
二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七	二八七

これによつて見るに、戦争の勃發後直ちに而も著實に騰貴して行つたものは、食料品であることがわかる。これは最高價格の公定によつて一九一七年の後半では少しく下落したが、その後公定價格制度に縛られながらも約一年間輕微な騰貴を續けた後、又も大巾の騰勢に轉じてゐるのである。

凡そ戦争は老大な需要を作り出すことによつて異常な増産の刺戟となるものであるが、この刺戟に應じて増産を行ふことが出來ず、むしろ反對に減産に向かはざるを得ないものが、食料品の生産である。それは戦争が

農業勞働力を多量に奪ふと共に、又農業用勞役獸を多量に奪ひ、同時に農業用機械器具及び肥料の供給が著しく減少するからである。そしてこれが、單に英國の如き食料品輸入國のみに限らずに食料品の價格騰貴が一般に生じた原因であり、現に大戰中は各國共に著しく農業生産の減退を見、そしてその減少の特に甚しかつたのは甘薯、馬鈴薯、甜菜の如き、在來多量に生産せられてゐた大衆用食料品であつたのである。(E. Wagemann, Die Nahrungswirtschaft des Auslandes, 1917.)

同じ事實を少しくドイツに就いて振返つて見よう。先づ獨逸の代表的植物性食物として、豆類、馬鈴薯、パンの三つをとり、更に代表的動物性食物として豚脂、牛肉の二つをとり、開戦の際の一九一四年七月のそれ等の小賣價格と一年後の一九一五年七月のそれとを比較して見るに、プロシアの五十一都市、バアデンの百三十徵稅區、獨逸の六十地方の指數は次の如くである。(Karl Pribram, Zur Entwicklung der Lebensmittelpreise in der Kriegszeit.)

第五表 獨逸開戦一年後主食物價格騰貴(一九一四年七月一〇〇)

	プロシア	バアデン	獨逸
豆類	二九〇	二四七	二七〇
馬鈴薯	一六八	一四八	一七〇
パン	一四二	一三三	一六三
豚脂	二三九	一八七	二五六

併しながら食料品に關してはなほ特別の戦時中の困難が存在する。それは食料品は主として嵩高なる爲め、その輸送上の困難が存在するといふことである。例へば近代的大戦争に於いては交通運輸機關は次の如き順位によつて運営せられるものと稱せられてゐる。(Otto Goebel, Deutsche Rohstoffwirtschaft einschliesslich des Hindenburg-Programms.)

第一 軍事需要

- 一 戦闘需要
- 二 兵站需要
- 三 經理需要

第二 戦闘經濟需要

- 一 軍事工業の需要
- 二 軍需品及び生活資料を生産する労働者の需要
- 三 軍需品生産及び國內原料調達の増加の爲めの需要
- 四 交通運輸機關の需要
- 五 軍需工業に關する研究の爲めの需要

第三 非戦闘員需要

一 生理的需要

二 心理的需要

すなはち軍事需要は一切の需要に優先して満たされなければならない。このことは當然に、平時的商品の輸送に對する大なる障害となる。そして食料品は前述の如く嵩高である爲めに殊にその打撃を深刻に被らざるを得ない。勿論食料品と雖も軍事需要を充するものである限り急速に輸送されるであらう。併し軍事需要を充すべき食料品が、軍隊及び他の軍需品と共に、急速に輸送さればこそ、一般非戦闘員の爲めの食料の輸送が非常に困難となるのである。

例へば前大戦の際には、ドイツに於いて鐵道車輛の不足による輸送力の不足が戦争經濟上の重大困難の一つをなした。輸送量の絶對的増大に加へて空車の一方停滯が起つて、鐵道輸送能力は著しく低下した。併し軍事需要は何物にも優先する。その結果として、常に非軍事需要に對する食料品の輸送が困難となつただけではなく、更に工業や農業に供給すべき石炭の輸送力が著しく低下した。更に肥料の輸送量も大いに減少した。その結果として鐵工業や火藥工業等の直接的軍需品の生産が大きな障害を蒙つた許りでなく、發電や農業生産までも重大な打撃を受けることゝなつた。その爲めに先づ機關車や貨客車の建造によつて積極的に車輛を増加すると共に、又構内線を大規模に増設して空車の廻送をはかり、以て車輛の走行率を向上する策がとられたのであ

るが、併しかゝる對策自身重工業の軍需品供給量に影響を及ぼすものである爲め、到底十分には行はれなかつたのである。(Erich Ludendorff, Urkunden der Obersten Heereleitung über ihre Tätigkeit 1916—18.)

かゝる輸送上の困難は食料品の價格を騰貴せしめる有力な一因であり、それは直接的には食料品の配給を攪亂妨害すると共に、又間接的にはその生産の障害となるものである。この輸送上の困難がその配給に與へる影響は特に注目すべき形をとつて現れる。これを保證する爲めに、大戰中の奥國の諸都市をとり、そこに於ける一九一四年六月の牛肉、豚脂、牛乳、食用バター、鶏卵、馬鈴薯、砂糖、石油、石炭といふ、主として食料品から成る生活必需品九品目の價格と、開戦二年後の一九一六年六月に於けるそれとを比較して見ると、次の指數が得られる。(Pribram, *ibid.*)

第六表 開戦二年後の生活必需品の價格指數(一九一四年六月一〇〇)

ブレゲンツ	一八五	クラカウ	二一六
リンツ	一八九	トロツバウ	二二六
クラアゲンフルト	二〇五	ケルツ	二三八
ライバハ	二〇五	トリエスト	二四八
インスブルック	二〇七	ウィーン	二五四
ザルツブルグ	二〇八	ブラアグ	二八二
グラアツ	二一二	ブリニン	二八六

これによつて見れば、生活必需品の価格は、開戦後二年にして、ある都市では三倍近くの騰貴を演じてゐるのに、他の方面では僅かに二倍近くの騰貴しか示してゐないことがわかる。これは食料品の不足は大消費地たる大都市では特に敏感に價格の上に表現されるといふことを別にすれば、主として生産地からの輸送を多く要する大都市では輸送上の困難によつて騰貴が特に甚だしいことを物語るものである。

五

物價はかくの如くに大戦中に著しく騰貴したのであるが、然らばこれに對應する勞賃は如何なる變動を示したであらうか。勞賃も亦明かに騰貴して行つた。凡そ大戦争の開始直後は、産業の再編成の必要上可成りの失業者を出すものであるが、今は暫くこれを別とし、就業労働者の勞賃の變動の跡を辿つて見よう。先づ英國に就いてレイバ・ガゼットの調査によつて見るに、建築、炭鑛、其他鑛業、製鐵、鐵工造船其他金屬工業、紡績、織布、陸上運送及船渠、製紙印刷其他、硝子製陶其他化學工業、其他事業、地方廳勤務の十二大部門に於ける勞賃騰貴率の粗平均は二一〇—二一五であり、その内容は次の如くである。(Bowley, ibid.)

第七表 代表十二職業部門勞賃指數(一九一四年七月一〇〇)

	最 高	最 低	粗 平 均
(鐵工業不熟練工)	1		105
(煉瓦積熟練工)			103
			105

一九一五年

1

105

一九一六年	1	108	1151120
一九一七年	154	122	1351140
一九一八年	213	157	1751180
一九一九年	255	185	2101215

すなはち勞賃は休戰の際には開戰時の略々二倍に騰貴したことが知り得られる。

勞賃の變動を辿るに當つて特に注目を惹く事實は、熟練労働者と不熟練労働者との騰貴の程度の相違である。右の第七表に於いても、騰貴の最高を示せるものは不熟練労働者であつて最低を示せるものは熟練労働者であるが、戦時には一般に成年不熟練労働者の騰貴が最高である。その一例を擧げるに、一九一五年三月に南ウエイルズの製鐵工場は戦時手當を支給したが、その額は週労働十五志以下の者は一志、十五—二十志の者は二志、二十一—三十志の者は三志、三十一—四十志の者は二志であつた。又同じく一九一五年四月のハダズフィールドの毛織物工場の手當も、十志以下の者は六片、十志以下の女子及び二十志以下の男子は一志、二十一—三十志の男子は二志六片であつたが、三十一—四十志の者は僅かに二志であつた。又鐵道業や建築業に於いては一般に熟練不熟練の如何を問はず同額の戦時手當を支給した。これ等は何れも不熟練労働者の手當支給率のより大なることを物語るものである。更に詳しくは、――

第八表 熟練不熟練労働者勞賃騰貴指數（一九四年—〇〇）

年	煉瓦積労働者		鐵工業労働者	
	熟練	不熟練	熟練	不熟練
一九一五年	一〇二	一〇三	一一〇	—
一九一六年	一〇八	一一五	一一一	—
一九一七年	一二二	一三四	一三四	一五四
一九一八年	一五七	一八五	一七三	二一三
一九一九年	一八五	二二四	一九九	二五五

何故にかゝる騰貴率の差異が起るかといふに、それは勞賃の騰貴が物價騰貴に壓迫されて餘儀なく起るから
 のことである。平時に於いては熟練労働者はより、高い勞賃を得てゐる。従つて物價騰貴が生じても彼等はなほ
 生活程度の引下げによつて或程度までこれに對處することが出来る。然るに不熟練労働者に於いては、物價騰
 貴は直ちにその社會的生活の不可能を意味する。すなはちこれだけの事實から云つても、物價騰貴が先づ起つ
 て然る後餘儀なく勞賃騰貴が生ずるものなることが理解せられ得るであらう。

これと共に考慮に入れるべきことは、女子労働者による男子労働者の代位である。ドイツに於いては既に開
 戦直後、一九一四年八月四日に、女子労働者及び少年労働者の勞働條件を決定する法律が公布せられた。これ
 は女子及び少年の勞働力を動員する爲めのものであり、一九一六年十二月五日公布の祖國奉仕法と共に、所謂
 勞務動員を目的とするものである。これによつて女子労働者が幾何の増加を遂げたかは、疾病互助會の勞働統

計がこれを示してゐる。今開戦直前の一九一四年七月一日の女子労働者の疾病互助會々員數の比率と、二年後の一九一六年七月一日のそれとを比較すれば、次の如くである。

第九表 ドイツ女子労働者疾病互助會員比率の變化

労働部門	一九一四年七月一日	一九一六年七月一日
冶金、金屬、鐵工業	九%	一九%
化學工業	七	二三
電氣工業	二四	五五

そして開戦後約一年の一九一五年七月一日から翌年の同日までに、女子互助會員數は約七十五萬人の大増加を示してゐるのである。(Karl Helfferich, Der Weltkrieg. II. Bd.)

英國に於いても亦女子労働者は著大な増加を遂げてゐる。すなはち、(Bowley, ibid.)

第十表 英國女子労働者就職狀態の變化 (單位一、〇〇〇名)

職業部門	一九一四年七月	一九一八年七月	増	減
工業	二、一七九	二、九七一		七九二
家庭傭婢	一、六五八	一、二五八	(-)	四〇〇
商業其他	五〇五	九三四		四二九
官廳(教育を含む)	二六二	四六〇		一九八

戦争經濟と消費節約 (吉田)

農業	一九〇	二二八	三八
旅館、酒場、劇場其他	一八一	二二〇	三九
交通運輸業	一八	一一七	九九
其他	九七三	一、一二三	一五〇
合計	五、九六六	七、三一一	一、三四五

この間に成年女子及び少女の人口は約九十萬の増加を示してゐるが、併し女子労働者は百三十五萬を増加し、而も家婢は四十萬を減少してゐるのである。

然らばかゝる女子労働者の勞賃は如何といふに先づ輕工業に於いては一九〇六年を一〇〇として一九一五年五―八月に於いて一一六、一九一八年九―十二月に於いて一八五を示してゐるに過ぎない。他方重工業に於いては如何といふに、女子法定勞賃と男子平均勞賃とを比較すれば次の如くなる。

第十一表 英國男女労働者勞賃比較女子法定勞賃

	女子法定勞賃	男子平均勞賃		
		熟練 不熟練		
一九一四年	八月	一	三九―四三志	一
一九一六年	二月	二〇志	一	一
一九一七年	四月	二四	一	一

一九一七年	八月	二六半		
一九一七年	十二月	三〇		
一九一八年	九月	三五		
一九一九年	一月	四〇		
一九一九年	四月	一	七七—八〇	五八

かくの如く男子労働者に代位した女子労働者の労賃は男子と比較にならぬ程低かつたのである。

六

大戦争による消費節約の實情を知る爲めには従つて物價騰貴指數と労賃騰貴指數とを簡單に比較することを以てしては足りないのである。先づ前に一寸觸れた如くに、歐洲大戦の際には、開戦直後再編成を一應完了するまでに約一箇年を要したのであるが、この期間には可成りの失業者が発生した。彼等は失業者である限り労賃を得ないのであるが、併し彼等の無労賃は労賃指數の上に現れて來ない。次に又労賃指數は男子労働者に就いて擧げられるのであるが、併し戦争によつて大規模に減少する男子労働者に代位せる女子労働者の労賃はこゝには反映せられない。女子労働者の労賃は前記の如く男子のそれよりも可成りに低いものであつた。然らば假に男子労賃が十分であつたとしても全體としての生計は悪化せざるを得ない筈である。然るに男子労働者の労賃も亦物價騰貴と比例して騰貴して行つたものではなく、これに壓迫せられつゝ餘儀なく上昇して行つたも

のであることは、不熟練労働者の労賃の騰貴率のより大なることから知り得られるところなのである。すなはち英國の場合に就いて云へば、前述するところから明かなる如くに、或年の物價指數はその翌年の労賃指數と一致するものであつた。労賃騰貴が一年宛後れるといふことは、労賃が漸く昨年の物價水準に追附いた時には物價は更にもその上に騰貴してゐることを物語るものであり、結局生計の困難は不斷に急迫してゐるといふことに外ならないのである。

このことを明かならしめる爲めに、今一例を引いて、ドイツに於ける一九〇七―八年の個人當り生計費支出内容と、一九一六年四月のそれとを、比較して見よう。(Carl von Tyszka, Die Veränderungen in der Lebenshaltung städtischer Familien im Kriege.)

第十二表 ドイツに於ける個人當り生計費支出内容の變化(%)

	一九〇七―八年	一九一六年四月	金額増減率
食料品、嗜好品	四五・五七	五二・一四	七八・二六
住居、家計	一七・九七	一一・三一	一〇・一八
衣服、洗濯	一二・六五	九・五三	一七・四三
衛生、照明	四・〇六	三・六一	三八・四六
租税	一・四三	三・一〇	二四一・一七
其他	一八・三二	二〇・三一	一二七・五三

すなはち食料品及び嗜好品に支出される比率は四割六分弱より五割二分強に増加して居り、それに對する支出金額は約八割の増加を示してゐるのである。

併し嘗に食物への支出割合が増加しただけではない。支出割合が増加してゐる食物は實はその内容に於いては著しく劣悪化してゐるのである。すなはち、

第十三表 個人當り食物支出一〇〇中に占める重要食料品への支出比率

の變化、及び支出金額増加率(%)

	一九〇七年八月	一九一六年四月	金額増加率
パン、ビスケット	一七・六六	一一・〇八	二〇・五〇
麥粉、碾割	三・一七	四・一七	一三一・二五
馬鈴薯	三・五七	五・八〇	一八六・一一
バター、脂肪	一三・六九	一一・七二	五〇・七二
肉、肉製品	二六・六四	二一・七八	四三・九四
魚類、燻製品	一・六八	四・五一	三七〇・五八
鶏卵	三・三二	六・六五	二五二・二三
牛乳	一〇・九六	七・八一	二五・七九
チーズ、凝乳	一・七八	二・八四	一八〇・五五

これによつて見ると、先づ植物性食物に就いて云へば、その中高級なるパン、ビスケット類への支出が減少

し劣質なる馬鈴薯への支出が激増し、又動物性蛋白質の給源としては獣肉への支出が減少してこれに比して劣質なる魚類への支出が激増し、最後に乳及び乳製品に就いて云へば、生乳及びバターへの支出が激しく減少してゐるのが見とれる。

結局生計費中の食物への支出率は増大してゐるにも拘らず、その食物の内容に立入つて見るに、その品質の劣悪化は明瞭に看取されるのである。

これを要するに、大戦争の際に於ける消費節約又は生活程度の切下は不可避のことに屬する。そしてそれは單に道德運動位では解決し得ざる程深刻なるものである。戦争經濟に於ける消費節約の問題は、従つて、如何なる手段によつてこの消費節約を、國民全體が最も満足の行く形で、而も最も大規模徹底的に遂行するかといふことに歸する。

(後記)

本稿に於いて充分意をつくし得なかつた點が、多々あるが、それについては拙著『戦争と物價』及び『戦争と國家財政』を参照せられたい。